様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年 6 月 6 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2009
課題番号：19520199
研究課題名（和文）　20 世紀フランス文学における時間の探究

研究課題名（英文）　Study on Time in French 20th Century's Literature

研究代表者
塚本　昌則　（TSUKAMOTO MASANORI）

研究者番号：90242081

研究成果の概要（和文）：　２０世紀文学は多様な文芸思潮を生みだしたが、その全体の俯瞰を可能とするような創作意識を見出すことは可能だろうか？　本研究はこの作業を、多彩な時間意識の表現、とりわけ年代順の時間の流れとは異なる、さまざまな時間意識の表現という視点から分析しようとするものである。登場人物の人格の崩壊、物語の破壊という既存の形式の否定とみえるものの根底に、実際には人間に対する変わらない関心、他者のために苦しむ力があり、それが新たな創作意識へと向かう力学の一端を明らかにした。

研究成果の概要（英文）: 20th century literature has produced many literary forms. Is it possible to find a notion that would be common to all of them? Our project is to show that time consciousness at large (chronological consciousness and others) may be the key to understand the coherence of the literature of this period. At the very bottom of the negation of existing forms (such as the end of the traditional character or the destruction of the narration), literature has always been a testimony of human capacity to sympathize with others or suffer for them, which is an unparalleled source for the renewal of creation.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2008 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総　計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：細目：文学・ヨーロッパ語系文学
キーワード：(1) 前衛 (2) 後衛 (3) 紋切り型 (4) 死 (5) 視覚的体験 (6) 時間意識 (7) 20 世紀文学 (8) ユートピア

１．研究開始当初の背景

われわれは現在、時間に対する感覚が大きく変わりつつある時代を生きている。近代を支配してきた、過去から現在を経て未来に向かうという直線的な時間感覚は確実に変容しつつある。文学においても、１９世紀のフランス文学では、なによりも年代順の時間の流れが重要であったが、２０世紀文学においては、個人の独自性に焦点を当て、その個人の生涯をたどるような書き方は解体され、単純な年代順の時間に還元できないさまざまな時間のあり方が表現されるようになった。

本研究はその時間表現の多様性を追求すると同時に、その作業を通して、その根底にある「文学」概念の変容を明らかにすることを目指すものである。

研究の背景には、申請者が研究代表者を務めた「フランス文学における時間意識の変化」（基盤研究(B) 平成 16ー18 年度）での研究の進展がある。この研究の出発点には、現代における時間感覚の変化があった。絶え間ない革新という幻想を可能としてきた、過去から未来へと直線的に流れる時間という近代に特有の時間感覚は、さまざまな局面でゆらいでいる。そのようなゆらぎを、中世から現代にいたる時代の変遷のなかに位置づけようと試みたのがこの研究である。とりわけ近代文学に関しては、〈前衛〉と〈後衛〉というこれまでの研究の枠組みそのものの再検討をおこなった。これまでは、文学に対する見方そのものが一種の進歩史観の影響を受けていて、それ以前になかった形式の発明、それ以前になかった表現に可能性の開拓が高く評価されてきた。しかし、同時代の意識の中では〈古くさく〉感じられた〈後衛〉の作品であっても、生きる時間の感触を確かに伝えてくるものには、何度でも蘇る力が認められる。逆に〈前衛〉の活動においては、過去の形式の破壊という魅力的な所作を超えて、一人の人間が生きる、矛盾した世界の総体を伝える力がなければ、その世界は忘れられてしまう。〈前衛〉という言葉そのものが体現しているように、近代は伝統の否定を大きな原動力とする時代であった。オクタビオ・パスが指摘するように、近代は「断絶の伝統」という、過去の否定そのものを伝統とするという矛盾を生きてきた。それでも、もっとも新しいものが、直ちに無限の遠い世界に遠のいてしまう世界は確実に変化し、いまや求められているものは時代の変化を超えて生き延びてきた価値の再評価ではないだろうか。

この問題について共同で研究したパリ第８大学のウィリアム・マルクス教授が示しているように（『２０世紀における〈後衛〉たち』『文学の終焉』）、〈前衛〉と〈後衛〉という枠組みの再検討は、文学が現在置かれている状況そのものへの考察につらなっている。１９世紀初め、それ以前のレトリックの伝統を基盤に、定まった主題について書く「文芸」から、作家や詩人の独創性を打ち出す「文学」へと移行することで始まった近代文学は、いま確実に曲がり角を迎えている。それがどのような形で変化しつつあるのかという点について、「フランス文学における時間意識の変化」では、十分に研究することができなかった。今回は２０世紀を中心に時間意識の探究を研究することで、近代文学がたどってきた変遷を大きく俯瞰する視点を形成することを目指した。

２．研究の目的

年代記的な時間の流れとは異なるどのような時間意識が、２０世紀文学に見られるのか。また、そうした多様な時間意識を俯瞰することを可能とするような視点はあり得るのか。――この疑問を明らかにすることがわれわれの研究の目的である。

ここで問題となるのは、ベルクソンの『時間と自由』『物質と記憶』、プルーストの『失われた時を求めて』といった、過去から未来へと直線的に流れる時間とは異なった時間感覚を全編にわたって追求する作品だけなのではない。シュルレアリストたちもまた、日常を超えた不可思議な次元を垣間見る一瞬を求めつづけ、その閃光のような美を組織的に生活の中に現出させることを目指した。２０世紀後半に独自の進展を遂げる自伝についても、シュルレアリスム・文化人類学・精神分析という多様な根を綜合して独自の自伝世界を創りだしたミシェル・レリスの『遊びの規則』、自分の体験だけではなく、父親や祖先の体験をも取り込み、きれぎれの記憶と感情の断片をつなぎ合わせて作られるクロード・シモンの『アカシア』など、単純なクロノロジーに還元できない形での創造が行われている。年代記的時間とは異なる時間意識は、実に多様な現れ方をしているのである。

では、２０世紀フランス文学において、具体的にどのような時間意識が描かれたのか？　それらの時間意識の探究は、どのような作品形式を産みだしたか？　本研究では、具体的に次の三点に焦点を当てて課題の検討を行う。

① どのような時間意識が描かれてきたのか、その意識がどのような作品形式を産みだしてきたのかを、二十世紀文学を対象に徹底的に検討する。ロラン・バルトの写真論などのように、小説、詩、エッセー、哲学などの分類に対応しない、ジャンル分けを横断する作品も積極的に研究の対象とする。

② とりわけ、「自伝」と呼ばれる形式の可能性を、虚構作品にまで範囲を広くとって分析する。ここで問題となるのは、「自伝」形式そのものの研究ではなく、時間意識の多様性という視点である。虚構を視野に収めることで、時間意識がどこまで創造性に関わってくるかという点を確かめることを目指す。

③ 二十世紀文学を大きく捉えるとき、〈前衛〉〈後衛〉とは異なったどのようなパースペクティブが可能かを明らかにする。この課題は「文学」という概念そのものの再検討をふくんでいる。今回の研究では、十九世紀初

頭における「文学」概念の生成そのものには重点を置かない。どのような文学概念が終焉しつつあるのか、書くという行為へのどのような考え方が台頭しつつあるのかを明らかにすることを目標にする。

学術的な特色は、個人の独創性、新しい形式、伝統の否定といった、近代において重要性を増した諸価値を批判的に検討し、〈後衛〉に押し込められることで十分に評価されなかった流れに光を当てることを目指す点にある。それは逆に、〈前衛〉のなかで命脈を保っている時間意識にも新たな照明を当てることになるだろう。こうした視座から「文学」概念の変容を明らかにすることに、本研究の意義がある。時代がどのように変わっても、人間の人間に対する興味は変わらないし、それを何らかの形で言葉にしようとする衝動も衰えることはない。われわれは今後、どのような考えを背景に、この書くという活動をつづけていくのだろうか？

３．研究の方法

文学研究の基礎をなしているのは、テクストの系統的な読解、重要なテクストの選択、選択されたテクストの重層的な解釈という工程である。本研究においても、この基礎的な研究に十分な時間とエネルギーをかけることが、結局は研究を進展させる大きな力となることは間違いない。文学研究の本義は、言うまでもなくテクストの可能性を汲み尽くそうと努力する点にある。テクストはある深い亀裂から生じてくるものであり、どのようなテクストも、それが検討の対象となる強度を備えたものであれば、すでに知られている知識や構造に容易にはおさまらない、ある危機的な状況を体現している。その危機が、２０世紀という極めて近い過去においてどのような歴史的コンテクストに位置づけられるのか、そしてその危機からどのような新たな作品創造がおこなわれたのか、さらにはその結果、「文学」という概念がどのように変容していったのかを分析する過程が、われわれの研究のもっとも基本的な作業となる。この問題意識を出発点として、研究分担者間の間で頻繁に情報交換をおこなう。さらには狭義の文学作品だけにとらわれず、文化史に関する研究書や時間に関する哲学的文献にも積極的にあたってゆく。分野を超えた研究の総合をおこなってゆくために、それぞれの専門分野の研究者からレクチャーを受けることも重要となる。

同時に、これまでの研究の枠組みを再検討し、「文学」概念そのものの変容への考察を積み重ねてゆくために、研究分担者による研究会だけではなく、関連分野で研究をつづける国外研究者にも、積極的に情報の交換を働きかける。具体的には、パリ第１０大学のウィリアム・マルクス教授、ソルボンヌ大学のミシェル・ジェルティ教授、グルノーブル大学のジル・フィリップ教授、テル・アヴィヴ大学のシルヴィオ・イェシュア名誉教授などと緊密な連絡を取り合い、研究会や講演会を開催する。実際、イェシュア教授には 2008 年 6 月 10 日、次第に重要性が認められるようになってきた〈後衛〉作家ジャン・ポーランについて講演してもらい、マルクス教授には 2009 年 7 月 6 日レオナルド・ダ・ヴィンチがヴァレリーやフロイトといった一九世紀末から二十世紀初めの作家・哲学者に及ぼした影響に関する講演、翌日 7 日にはヴァレリーに関するセミナーをおこなってもらい、日本滞在中には何度も情報交換の機会を設けた。

こうして得られた知見は、普段の基礎的な作業に活かされ、研究をさらに推進する力となった。

４．研究成果

研究代表者・研究分担者があげた成果は多岐にわたるため、個別の研究成果についてはそれぞれの研究発表を参照していただきたい。ここでは、今後の研究につながる視点の形成を可能とした研究に焦点を絞って報告する。

その意味でとりわけ注目すべきは、中地義和による発表「現代性とメランコリー――変容するパリのボードレール」である。現代性は絶え間ない革新の美学だという偏見が、これまでの文学研究にはあった。しかし実際には、「現代性」という概念を確立した詩人ボードレールにおいてさえ、それは「メランコリー」に結びついていた。この点は２０世紀に入ってからも変わらず、シュルレアリスムも前衛の運動というよりは、古びたもののなかにある革新的な力を解き放つ運動だったというベンヤミンの見解がその本質を射貫いている（塚本昌則「『シュルレアリスム宣言』とテスト氏――ヴァレリーとブルトンをめぐって」;「シュルレアリスム的視覚体験とは何か」（鈴木雅雄・齊藤哲雄との鼎談））。

また、中地義和、野崎歓、畑浩一郎、研究代表者がおこなった旅に関する一連の研究は、他の科研費研究との関連で行われてもいるという側面もあるが、本研究にも十分なインパクトをあたえた。文学の源泉は、小説の登場人物の人格が曖昧になり、これまでの年代記的時間の流れに従って語られる物語の構造が破壊されても、それによって汲み尽くされることなどないことが明らかになったからである。異質な世界との接触、それによるさまざまな時間意識の発生、さらにはそうした世界を語る言葉の、ある時には平凡な記

述、ある時には虚構と現実を織り交ぜた異様な形式は、他者への興味がつねに文学を支え続けてきたことを証明している。このことは時代がどれほど移り変わろうと変化しない、文学の強力な基礎となっている。

最後に、研究代表者の「二十世紀フランスと死」は、一見個別の意識にとらわれ、袋小路に陥っているように見える現代文学の登場人物たちが、実際には死を乗り越える契機をさまざまなもののうちに見いだしていることを明らかにした。死は終わりではなく、何ものかの再生である――この視点は、さまざまな作家の作品の分析を通して、さらに展開する必要があると感じている。

以上の諸研究から明らかになったことは、「メランコリー」「死」「旅」「無意識」などの文学上のトポスについてさらに分析を深めることで、２０世紀フランス文学をさらに包括的にとらえることが可能となるということである。形式の多様性のもとに、繰り返し文学が立ち戻る場所があり、その場所こそ文学に新たな活力をあたえるのだ。フランス文学は中世において他人のために苦しむ力を見いだし、ルネサンスにおいて特殊な個としての存在を探求する愉しみを見いだした。その時すでに問題となっていた「メランコリー」などのトポスは、時代が変わっても相変わらず文学生産を支える力となっていたのである。したがって、われわれの次の問題は、現代においてもなお活力を失わないトポスが何であるかを調べ、それがどのような表現形式をとっているのかを明らかにすることである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 20 件）

塚本昌則 (1),「「無意識」と「錯綜体」――フランス作家たちの「抵抗」」、『フロイト全集』月報第 13 号、2009 年、p. 11-15（査読なし）

塚本昌則 (2),「二十世紀フランス文学と死」、『死生学研究』、2009 年第 11 号、p.111-146（査読なし）

Masanori TSUKAMOTO (3), « La modernité et la simulation chez Valéry — les puissances de l'inachèvement », *Paul Valéry : « Regards » sur l'histoire*, 2008, no.1, p.327-334（査読なし）

Masanori TSUKAMOTO (4), « Les Paradis artificiels et Monsieur Teste : la théâtralisation de la conscience », *La Licorne*, 2008, no.83, p.193-203 （査読あり）

Masanori TSUKAMOTO (5), « Le langage du rêve, le langage d'images », *Image, Imagination, Imaginaire autour de Paul Valéry*, 2007, p.213-223（査読なし）

塚本昌則 (6),「紋切り型について――フロベール『ボヴァリー夫人』を中心に」、『文学と笑い』白百合女子大学 言語・文化研究センター編、弘学社、2007 年、p.117-134（査読なし）

塚本昌則 (7),「『シュルレアリスム宣言』とテスト氏――ヴァレリーとブルトンをめぐって」、『水声通信』「思想史のなかのシュルレアリスム」、2007 年第 20 号、p.56-65（査読なし）

Yoshikazu NAKAJI (1), « Les "voix instructives" dans les poèmes de 1872 », *Europe*, 2009, 87 année, no. 966, p. 130-138（査読あり）

Yoshikazu NAKAJI (2), « Le "tombeau" dans *Les Fleurs du Mal*, *Baudelaire et les formes poétique* », *La Licorne*, 2008, no.83, p.25-40（査読あり）

Yoshikazu NAKAJI (3), « Sur la "fatalité du bonheur" », *Parade sauvage*, 2008, numéro supécial, p.586-595（査読あり）

野崎歓 (1),「海外文学最前線・フランス語圏　新しい小説は、現実に働きかける」、『群像』2009 年、第 64 巻第 5 号、p. 331-340（査読あり）

野崎歓(2),「異邦の香り――ネルヴァル『東方紀行』論　第 4 章　女神の島」『群像』2009 年 3 月号、p.226-241（査読なし）

野崎歓 (3),「異邦の香り――ネルヴァル『東方紀行』論　第 3 章　女の都」『群像』2009 年 2 月号、p.284-299（査読なし）

野崎歓 (4),「異邦の香り――ネルヴァル『東方紀行』論　第 2 章　旅人が名前をなくすとき」『群像』2009 年 1 月号、p.166-179（査読なし）

野崎歓 (5),「剥き出しの生　ウエルベック以降のフランス文学」、『ユリイカ』2008 年 3 月号、p.60-67（査読なし）

野崎歓 (6),「吉田喜重の出発――『甘い夜の果て』まで」、『群像』2008 年 11 月号、p.275-282（査読なし）

野崎歓 (7),「異邦の香り――ネルヴァル『東方紀行』論　第 1 章　遊歩への招待」『群像』2008 年 12 月号、p.82-96（査読なし）

野崎歓 (8),「『レオ・ビュルカール』を読みながら」、『ネルヴァル手帖』2008 年第 5 号、p.85-90（査読なし）

畑浩一郎 (1),「ゼトネビーとゼイナブ――女主人公の名前をめぐって」『ネルヴァル手帖』2008 年第 5 号、p.123-143（査読なし）

畑浩一郎 (2),「自分を語る旅行者　シャトーブリアン『パリからエルサレムへの旅程』」、『仏語仏文学研究』、2010 年、第 39 号、p. 25-44（査読あり）

〔学会発表〕（計 13 件）

塚本昌則 (1),「クレオールの幼年時代――パ

トリック・シャモワゾー『最期の身ぶり――カリブ海偽典』をめぐって」、日本フランス語フランス文学会2009年度秋季大会、ワークショップ「クレオール再考」、2009年11月8日、熊本大学

Masanori TSUKAMOTO (2), « Qu'est-ce que le dehors ? – une lecture du "retour de Hollande" de Valéry »、コロック « Du récit du voyage à l'œuvre littéraire »「旅行記から文学作品へ」、2008年10月16日、東京大学文学部

塚本昌則 (3), 「フランス文学と〈私〉――ポール・ヴァレリーをめぐって」、PESETO 人文学学術会議、2008 年 3 月 28 日、韓国・ソウル大学

Yoshikazu NAKAJI (1), « Les lignes de force de "Nuit de l'enfer" », シンポジウム« Rimbaud. Des Poésies à la Saison », 2009年12月12日, フランス・パリ第4大学

Yoshikazu NAKAJI (2), « L'avenir de la culture française au Japon »,日本フランス語フランス文学会でのワークショップ、2009年5月24日、中央大学

中地義和 (3), 「ル・クレジオ、フランスからの出発」、東京外国語大学「多分野研究交流」2008年12月11日、東京外国語大学

中地義和 (4),「現代性とメランコリー――変容するパリのボードレール」、ブリヂストン美術館土曜講座、「パリと近代芸術家たち」第2回、2008年11月1日、ブリヂストン美術館

Yoshikazu NAKAJI (5), « *Voyage à Rodrigues* ou la double quête de Le Clézio »、コロック « Du récit du voyage à l'œuvre littéraire »「旅行記から文学作品へ」、2008年10月16日、東京大学文学部

Yoshikazu NAKAJI (6), « Voix des ancêtres, voix de soi : le cycles mauricien des romans de Le Clézio »、ピエール・ブリュネル教授退官記念シンポジウム「声」、2008年6月7日、フランス・パリ第4大学

Kan NOZAKI (1), « Retraduire Stendhal aujourd'hui : *Le Rouge et le Noir* dans le contexte japonais »、国際高等研究所研究プロジェクト「受容から創造へ」、2009年5月29日、京都・国際高等研究所

野崎歓 (2),「ネルヴァルとジュネ――『東方紀行』の現代性」、日本フランス語フランス文学会秋季大会ワークショップ「ネルヴァルの現代性を探る」、2008年11月9日、岩手大学

Kan NOZAKI (3), « Le *Voyage en Orient* de Nerval ou l'aspect "sentimental" du récit »、コロック « Du récit du voyage à l'œuvre littéraire »「旅行記から文学作品へ」、2008年10月16日、東京大学文学部

畑浩一郎 (1),「他者との邂逅――フランス・ロマン主義時代のオリエント旅行記をめぐって――」、地中海学会定例研究会、2008年12月13日、東京大学本郷キャンパス

〔図書〕（計 12 件）

塚本昌則 (1), 『〈前衛〉とは何か？〈後衛〉とは何か？――文学史の虚構と近代性の時間』（共編）、平凡社、2010、592 p.

Masanori TSUKAMOTO (2), *L'Autre de l'œuvre*, Presses Universitaires de Vincennes, 2007, p.213-223

塚本昌則 (3)、『フランス文学における時間意識の変化』、科学研究費報告書、平成16-18年度基盤研究(B)(2)、2007年、501 p.

Yoshikazu NAKAJI (1), *Rimbaud. Des* Poésies *à la* Saison, Classiques Garnier, 2009, p. 245-263.

Yoshikazu NAKAJI (2), *Rimbaud, l'invisible et l'inouï. Poésies, Une saison en enfer (1869-1873)*, Paris, Presses Universitaires de France, 2009, p. 120-140.

Yoshikazu NAKAJI (3), *Le Vers libre dans tous ses états. Histoire et poétique d'une forme (1886-1914)*, Paris, L'Harmattan, 2009, p. 33-45.

Yoshikazu NAKAJI (4), *Baudelaire et les formes poétiques*（編著）、Presses Universitaires de Rennes, 2008, 208 p

Yoshikazu NAKAJI (5), *L'Autre de l'œuvre*, Presses Universitaires de Vincennes, 2007, 363 p.

野崎歓 (1)、『こどもたちは知っている　永遠の少年少女のための文学案内』、春秋社、2009、195 p.

野崎歓 (2)、『文学・芸術は何のためにあるのか？』、東信堂、2009、p. 5-14

Masao SUZUKI (1), *J.-M. Le Clézio : Évolution spirituelle et littérature*, Paris, L'Harmattan, 2007, 290 p

Koichiro hata (1), *Voyageurs romantiques en Orient – étude sur la perception de l'autre*, L'Harmattan, 2008, 410 p.

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕

ホームページ等

http://www.l.u-tokyo.ac.jp/futsubun/

６．研究組織

(1)研究代表者

塚本　昌則（MASANORI TSUKAMOTO）
東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授
研究者番号：90242081

(2)研究分担者

月村　辰雄（TUKIMURA TATSUO）
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：50143342
中地　義和（NAKAJI YOSHIKAZU）
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：50188942
野崎　歓（NOZAKI KAN）
東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授
研究者番号：60218310
畑　浩一郎（HATA KOICHIRO）
東京大学・大学院人文社会系研究科・助教
研究者番号：20514574
鈴木　雅生（SUZUKI MASAO）
共立女子大学・文芸学部・専任講師
研究者番号：30431878

(3)連携研究者

なし